盛な若人の意気を遺憾なく発揮して将来を嘱目された（入場料五百円）。司会ー宝塚花組上原まり（柴田旭艶嬢）。粟津の露ー藤巻旭彰、石田三成ー城戸旭濤、うつぼ猿ー水藤五郎・小紘旭陽、城山ー須田旭舟、娘みゆきー林田旭石、仁科信盛ー山下晴楓、衣川ー金子旭昭、湖水渡ー藤巻旭陽、五条橋ー大場穂苑・高久穂芳・紘大知里穂仙・都穂鳳。

柿本錦城氏（本名吉郎氏）　旧臘十二月十九日病気のため逝去。氏は薩摩琵琶古参の弾奏家で新作北方領土、忠臣蔵、吉水錦翁、解脱の華、改訂夜討曽我等を京絃紙に発表し琵琶界に貢献された業蹟は大きい。謹んで哀悼の意を表します。（東京都）

高野旭嵐氏　昨年十一月十四日病気のため逝去、享年七十九。謹んで哀悼の意を表します。（福岡）

予告

○…京都琵琶協会三月定例茶話会　三月三日（日）午後一時協会事務所（平井春嶺氏宅）

○…故柴田旭栄女史追悼演奏会　三月十日（日）正午神戸市県民小劇場、主催旭堂会、後援日本旭会・平家物語を聴く会。旭堂会員二十二名出演、会主は新作「書道の栞」を前衛書道家神沢瑠璃師の即席書と共演の外諸舞踊五師の立方付にて旭堂女史や旭艶嬢が数曲演奏。

○…緞水会春季演奏会　三月十七日（日）午後一時大阪市北区天神筋町三八朝陽会館

○…山崎旭萃会全国大会　三月二十一日（休）午前十一時大阪難波高島屋八階ホール

○…故蔵本司水氏追悼演奏会　三月二十四日（日）正午神戸市生田区中山手通六丁目生田公会堂、主催一水会神戸支部・司水会。両会員の外東京並に京阪神の故人生前の紘友数氏ゲスト出演

○…日本琵琶振興会三月親睦研修会　三月二十四日（日）午後一時東京新宿洲鳳会館

○…京都琵琶協会春季演奏会　四月十四日（日）正午京都市東山区安井金比羅宮会館。各流派会員の外東京其他の数氏ゲスト出演

あとがき

「立春や明治の人は嘘（うそ）を云い」「鶯の肝（きも）つぶしたる余寒かな」◎誰かの句にこんなのがあったように記憶するが立春とは名ばかりで三月の声を聞こうというのに斯う寒くては春を告げる鶯も嘸肝をつぶしたことだろう◎永い異状乾燥に続く厳寒大雪の今冬異変、こう気候異状が繰返されては小松左京氏の「日本沈没」も或は夢物語ではなくなるかも知れぬ、桑原々々◎演奏会で時間が長すぎる！一回の演奏会は精々四時間、一曲の演奏は十五分以内、或は歌詞の文体がむつかしくて青壮年の人達には理解しにくい…等々の話題が段々取上げられて来た◎明治大正時代の呑気な空気が、忙がしい現代人には受入れられないという意見は尤も至極で琵琶も此際一考を要する大きな問題ではあるまいか◎テレビや寄席での万才落語の殆どが一回十分乃至十五分だし交替の早い詩吟や歌詞の通俗的な浪曲に最近メキメキと人気が湧いてきている反面、古典の内でも格調の高い義太夫などは余りテレビ・ラヂオなどに姿を見せない◎早い話が服装一つを取ってみても紋付袴はよいとして浄瑠璃の裃（かみしも）筑前琵琶の演奏衣や冠（かんむり）などは確かに時代錯誤の感がある、和服で座って演じる筈の落語家がテレビでは洋服姿でマイクの前に突立ったまゝやっている世の中である◎本号掲載の「琵琶の退潮とその起死回生策」でも是等について執筆者が卓見を披瀝されているが、演奏会で二十五分も三十分も一人で貴重な時間を独占して良い気持で弾奏し自分自身に酔っている図はこの頃は殆ど無くなったが、腹八分目の名言の通り肝賢の聴衆を無視して自分よがりにうつゝを抜かすような事があっては琵琶の生命も時間の問題と云わなければなるまい◎妄言多謝。

昭和四十九年三月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話〇七二六（八五）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第二三七号　京絃社

琵琶の退潮とその起死回生策（一）

時流に乗った民謡詩吟ー原形を根底より破壊ー異質の分子混入ー新しき演奏形式

（東京）　坂本錦道

評時界琵琶

時の流れと云うものは、あらゆる事象に思いもよらぬ変ぼうを来す。戦後の変化の最大なるものとして世はスピーディに変化し、急激なるテンポの早さを要求する。音楽や舞踊にしても、仮令ば若者のツイスト・ゴーゴーの如く狂舞と絶唱と驚くべき変化で、昔のように枯すゝきをゆっくりと楽しむ余裕というものがない。然しこうした行き過ぎの反面に於て、ユックリズムと云う事も、一つの調和を求める姿もないではないが、過去に於ける漫々的なものは全く葬り去られた観がある。

この時流を巧みに捕えたものに民謡と詩吟がある。心理的の内容としてテンポの早さがぴったり一致した。一人の舞台時間は僅々三分で事足り次から次と交替、更に俗っぽい事ながら誰しも「うぬぼれとカサ気」を持たぬ者がないように、老若男女を問わずマイクの前に立つ事は人としての夢でもあり、この意欲を捕えたのが民謡詩吟である。

民謡の全国大会は三日間連続一万人の観聴衆、舞台登場者は千五百人、詩吟にしても全国大会は五千人の聴衆を吸収する実状である。之に反して我々琵琶界に至っては、大会と云っても若者から見棄てられた老人会のように歯の抜けたもの、何ともやり切れない、いくら玆で地団駄踏んでも所詮ゴマメの歯ぎしりだ。

ある会場で私は琵琶が大好きだという青年からこんな事を問われた。「私は琵琶を習いたいと思っているが、一人一人の先生の節廻しが皆変っているので迷っている、どの先生の歌が標準でしょうか」との事である。

初代吉水錦翁とその門下の永田錦心が創始した芸風の根本をなすものは、旧来の謡いにくい節廻しをミーハー族にも直ぐに口ずさみ得るよう簡略化し、又之を学ばんとする弾法も極めて簡潔な手法をもってした。琵琶というものが完全に大衆化されたそのポイントは、錦心師の担々訥々たる弾風である。同師の没後門下の諸先生は、その原形より脱して益々個性を発揮された事はよい事ではあるが、原形を全く台無しにして、色々な異質の分子を混入させた所に試行錯誤と、之によって当然起る地盤沈下の現象が起って来た。そして前述の琵琶愛好青年が取り付く島もないという一つの参考材料を提起されている。

ところで、この時流とテンポに目もくれず、旧態依然たる体質を維持する琵琶界はどうなっているのか、明治大正時代の和弾、南明、神田倶楽部時代は来会者は下足料を払い、又弾奏者も歌や弾法を思いのまゝ長尺物を全曲歌っても誰も何とも思わず、聴衆も会場に溢れ倦怠も与えなかった時代もあった。然しお客というものは勝手なもので、今日に於ては牛のよだれのようなクドイ、そして長ったらしいものは全く見捨て去られてしまった。この状態が続くとしたら益々地盤沈下を早め、曽っての平曲の如く潰滅的命運を辿り、一部好事家の領域に入ってしまうであろう。

水藤さんのあるお弟子さんから聞いた話だが「いくら名人の先生でも三、四十分も聴かされたのではいさゝかウンザリする」と云う位であるから、まして吾々団栗連中がゆうゆうと〃山科〃などに取組んで三、四十分もやったのでは、忽ち聴衆のけん怠を誘発しお義理の来会者以外は皆逃げてしまうというのが今日の実際である。

琵琶が今日のように大衆から見棄てられたことは軍国主義加担でも何でもない、古い体

質を温存し時流逆行をやっている事をはっきりと認めなくてはならない。今日の琵琶界に於て、持ち抱えて来た長い曲目をもっと圧縮して、要点のみを謡いあげる工夫を先づ第一とし、次に舞台上の演奏時間を十分以内にする事である。さすれば多数の演奏者を少くも三十人位は登場可能となり、聴者にもけん怠を与えぬという最後の方法が考えられて来た。

昨年十月二十八日日本琵琶振興会に於ても、この問題を真剣に討議するため座談会が開かれた。そして十一月より一人十分以内の演奏を実行に移している、又遅まきながら各地にもそうした気運が出はじめている。

こうした舞台演奏方式が現れて来たのは去る四十七年、東京の有力な琵琶団体が堂々と四十人に近いメンバーで開演された時の事である。主催者側はこの人数をコナスには持時間を十分と定め、出と入を一分差引いて正味九分である。そして九分を経過すれば時計係は予鈴を発する、そして十分の所で容赦なく幕下しの強制執行を断乎として行うとの申し合せであったが、この処分に引懸った弾士も数人出た。この方式は非常に成功した、特に九分で打切られた時、聴者は「あの人のをもう少し聴きたかった」と言っていたが、そういう所に未練が残され、けん怠の隙を全然与えなかった。

（以下次号）

新曲　時は今也

平井春嶺作詞作曲

群雄割拠の戦国時代　我こそ国家統一を
果さんものと武将たち機会を覗いたりけり
茲に明智十兵衛光秀は　土岐源氏の末裔にて
織田信長に仕えしより　僅か十年の程にして
樹てし功も近江なる　坂本城に封ぜらる
されど主君の信長は　智勇勝れし光秀を
ひそかに恐れ何時の日か我を亡わん時来んと
疑心暗鬼を生じ来て　事ある毎に光秀を
辱かしめしぞうたてけれ時しも秀吉中国より
援けの兵を請いしかば　この援軍を信長は
光秀にこそ命じけり　光秀ひそかに思うよう
この半年が程は　殿の信任日に薄く
諸将居並ぶ面前にて受けし恥辱を堪えきしも
先には徳川家康の　饗応の役を免ぜられ
今又所領を召しあげられ　我より劣る秀吉の
その軍配に従えとは　侮蔑極まる仰せかな
これを忍べばこの後は如何なる仰せ有るべきや
残虐極まる信長は　一族郎党ことごとく
虐殺するは必定なり　されば我より兵を挙げ
天下を我手に収めんと思えど主君を殺しなば
謀叛人よと蔑まれん　いかゞはせんと光秀は
悩みに悩み今はたゞ　神慮に従い申さんと
心に決し愛宕山　大権現に祈念して
神籤を引けば凶と出る又引きたれどこれも凶

さては桔梗の旗挙げはとどまるべしとの神慮かなされど織田家の司令官それぞれ遠征中なれば
京に入りし信長の　警護は僅かの旗本のみ
さればこの機を逸すれば再び機会は無しと知る
今一度の祈念籠め　引きし神籤は吉と出づ
光秀深くうなずきて　かねて招ける友の待つ
西の坊に集まりて　百韻連歌を興行す
五月雨空は低くして　降る雨脚の音にぶく
光秀の心いと重し先づ発句は殿よりと促がされ
筆執り上げて書きけるは時は今天が下知る五月哉
アッと人びと驚きて　さてこそ殿は御謀叛と
思えどさらぬ態をなし　次々歌を詠みつぎて
百韻連歌を終了す　されど光秀は放心して
茶受けに出されし粽をば笹もむかずに食べければ
一同顔を見合わせり　又、光秀は一同に
本能寺の溝幾尺と　言いてうつろに笑いけり
悩み迷いし光秀は　五月雨煙る山を降り
亀山城に帰りきて　従子明智光春と
謀将斉藤利三に　固き心をしるしたる
一首の歌を示しける

こころ知らぬ　人は何とも言わば言え
身をもおしまじ　名をも惜しまじ

さては旗挙げと覚りたる　光春、利三両勇士
殿のお前にひれ伏して生死を共にと誓いけり
時は大正十年六月一日亥の下刻光秀の軍勢一万三千
亀山城を進発し　道を東へ老の坂
沓掛村に着きし時　休止を命じ光秀は
全軍に兵糧をつかわせて　さて一同に大音声
わが行先は京都なり　我は今より旗を挙げ
本能寺に攻め入りて　織田信長を亡して

天下を我手に収むるぞ　時は今也
時は今也皆の者　我に続けと叫びつゝ
鞭を東に指し示す　遅れじものと一同は
京都を指して駈せ進む　行く手を阻む桂川
ざんぶとばかり躍り入り唯一と息に押し渡る
ようやく白む京の空　桔梗の旗をなびかせて
本能寺指して進み行く本能寺指して進み行く」

我が道を行く

六十五年（一三）

西郷天風

かって、ある地方の中学校長と云う前歴のある富永老は、若人に対する興味も深く、茶呑相手としての私に彼是と注意を払うのも故なきに非らずで、いつも緋佐子女史の稽古がすむと茶室に呼ばれ、玉露の饗応である。

あの、子供のまゝごと用の茶器にも似た小形の湯呑茶碗に、半分にも足らぬ程の濃い茶ながら、少々にがみのあるそのうまさは何とも名状し難い。少しづつ舌の上にのせるようにして味わうその瞬間は、正に無心無我の境地と云えよう、そうした時の話題は書画骨董やてん刻のことであった。殊にてん刻については一入念入りであったのは、其道の尤物なるを自負しておれたからで、その技を私に伝授することも又楽しみの一ッだったらしく、大切にしておられるてん刻刀や印譜などを惜気もなく与えて下さるのだった。この事は私としてもこよなき悦びであり、生涯の心の糧となって今日に及んでおるのも有難いことである。

扨て之等は、当時としては珍らしくも、緋佐子と云う女性の入門によって授けられた喜びではあるが、奇しくも又一人女性の入門者が現われた。

元来琵琶の本場鹿児島では、明治時代男尊女卑の風習はげしくて、女性に琵琶をいだかせる事など有り得ない。甚だしいのは正月のような祝祭日に際して、必ず床の間に伝家の宝刀と並べて琵琶を麗々しくそなえ、注連飾りを張りめぐらして妄りに人を近づけず、殊に女性は身体を浄め礼装して、神前に仕える時と同様のよそおいでなければ其座敷に入ることすら許さぬ程の厳格な家風を厳守するむきもある時代だったが、東京では之に反して、琵琶の桧舞台が和強楽堂であった頃から、萩原しげ子や小田錦蝶さん（今健在の岡部錦蝶女史）など、堂々と名演奏を以て人気を集めており、むしろ女性達に奨励する傾向にあった。とは云え筑前琵琶とか新派の薩摩なら兎も角、純薩摩の鳳鳴会支部へ入門するとは正に珍らしい。しかも、アメリカに在留する邦人達の希望を忖度し、邦楽習得を目的に態々帰国の用事をつくったと云う熱心な婦人であった。従って滞在三ケ月の短期間中、殆んど毎夕の研修となったが、もともと三味線音楽の下地があって修得も早く、他に箏曲も習っておるとのことだった。

この婦人の御夫君はアメリカ、オークランドのホテル勤務の牛島秀雄といわれ、数ケ月前難病に罹り入院が必要となると、往復の旅費をかけても日本の方が安上りの関係から、半年前単身帰国し下谷あたりの病院に入院したが、近く退院と云うのでその迎えかたがた邦楽修業となった訳だが、一を聞いて十を知る程の優れた頭脳の持主だけに僅か二ケ月余りで桜狩一曲を完修し、弾法の方は何とか間に合う程度にこぎつけた。

そうこうする内、夫君が退院したからとて面接を乞うて来た。

その頃「敷島あられ」と称するかなり知られた菓子の本舗が、本郷池之端七軒町通り根津権現に近い左側にあり、その表二階に暫時の宿借りをしていた。

その話によると、オークランドにも邦人移民が多く、いづれもホームシック的な悩みを持たぬ者はない、従って日本人同士相集り日本式の酒宴をひらき、呑めや唄えやの雰囲気に浸るのが何よりの慰安であるのだが、それには三味線音楽が第一の必要条件であった。その上琴や琵琶も備わるとなると芸のヘタ上手など問題でなく、精神面だけでも計り知れぬ慰めになるとのことだった。

この牛島婦人の短期間邦楽の修得も多大の効果を収め得た事であったろう。

この三ケ月に亘る連日の稽古に私は相当疲労を覚え、暇あるごとに散歩を楽しむ様にな

り、四谷、青山と足に任せて歩きまわりつゝ、或る秋頃の日曜日に麴町のある宮様の門前近くさしかゝった折、前方から笑をたゝえながら声をかけて下されたのは、意外にも鳳鳴会々長木上武次郎先生であった。

〃やあ、よく来たな、此処で逢うてよかった。別に用があって出て来たのじゃないから家に戻ろう、ほんとによく来て呉れたなあ〃と一人悦に入っておられる。

私はついぞ一度も鳳鳴会本部を訪ねたことがないので町名すら知らなかったが、これは誠にモッケの幸いと、大先生の後について名も知らぬ坂路の中途左側の門内に入り、玄関から座敷へと無遠慮に通して頂いた。そして大先生の至芸「崩」の弾法など身近に拝聴することが出来たその喜びを、胸おどらせつゝ物語れば満留先生も吾事の如く喜ばれ、それ以来度々本部を訪問できる身分とはなったが、それも束の間、大先生には程なく御病気に罹られ遂に明治四十四年十一月五日、御年四十三才で此世をお去りになった。

天下分け目の天王山

辻　旭城

京都府と大阪府の境界にある天王山、寒さが忘れられて春霞の頃ともなれば、サントリー工場の上に点々と咲く桜花の美しさはたとえようがない。花吹雪も又変った趣きがある。

遠き昔の天正十年六月二日、淀の川原には蛍が飛び交うという自然美に背いて、人間闘争の激しい戦場絵巻が繰広げられた。山崎合戦は後世の歴史を決定づける有名な戦であり、山崎の背後の天王山が天下分け目の合戦場として喧伝され、後世に於ける重大な物事には総て〃天王山〃の名で叫ばれる。〃三日天下〃〃敵は本能寺〃〃洞ケ峠〃など慣用語化した是等の言葉は、皆山崎合戦の史実を捕えたものである。

戦国時代に見られる人間の美醜哀歓は極めて端的であり、後世の人々が過去の人間の群象に共通する面を発見し、興味を持つ事がこの合戦物語を大切に温存されて来たのであろうが、山崎合戦は日本人の心に特にドラマチックに受けとめられ、そのため是等の言葉が今日まで受けつがれて来たのであろう。

抑も山崎合戦は如何にして起ったか、この周辺は古戦場として余りにも有名であるが、高柳光寿博士監修の「古戦場」（人物往来社）から少しく抜萃してみよう。

天正三年（一五七五）織田信長は長篠の戦で武田勝頼の甲州騎馬兵団を潰滅させ威名を広く轟かせたが、天下を握るには上杉謙信、毛利輝元、石山本願寺など尚群雄割拠の状態で、前途は頗る多難であった。

信長はその当時〃短慮で仁徳の少なき人〃で通っていて、人間として酷薄無惨、本能寺で光秀に殺されるまでの信長・光秀の主従関係は〃戦国残酷物語〃とでも云えよう。天下統一を目ざす信長としては、その程度の酷薄さはやむを得なかったのかも知れないが、然し万目の見る信長の人間像は、多分に性格異常と云える。

だが、科学を戦闘に取入れる知力は大いに勝れ、武田軍を打破ったのも鉄砲を充分に使いこなし、近代戦の端緒を開いたのだから、武将としては勿論逸材だったといえよう。当時の鉄砲は火縄銃で引き金がなく、一々火薬に火をつけて発射し、一発射って次の一発までに時間がかゝり、その際に敵が突込んで来る、味方がそうなら敵も同様で、一発目を竹で作った楯で防ぎ、二発目のつめかえ中に敵に斬込むというのが武田の戦法である。

ところが信長はこのつめかえの時間省略に成功した。即ち鉄砲組を三列に構えさせ、第三列が打ち終るまでに第一列は後へ下がって、つめかえ玉ごめして弾幕を絶やさないという陣列を敷いた。信長がアイデアを実戦で成功させ、長篠合戦で甲州騎馬兵団を潰滅させたのは将に〃技術開発〃の勝利であった。

それから四年目に安土城を築いたが、この新戦法を採るため当時では珍しい平山城形式をとり武威を天下に誇示し、その後得意のスピード作戦で石山本願寺の勢力を圧伏したのを始め、天下制覇のため着々奏功した。〃信玄星〃が消え〃謙信星〃も一信玄との戦に疲れている内に上洛がおくれ、信玄に先を越さ

れて乾坤一擲、遠征を決意したその出発直前中風に倒れた〃謙信星〃も流れ星となり〃信長星〃がたゞ一つ輝きを増していった。

中国の毛利、関東の北条を攻略のため着々準備を進める一方、徳川と和を固め天下人としての独走体制に入って行った信長が、この雄図が光秀によって挫折させられようとは夢にも思わなかったろう。本能寺に消えた信長の無念さは〃飼犬に手を嚙まれた〃どころのものではあるまい。

一方、光秀の反逆は飽くまで野望であり瞬時に消え去ったものゝ、案外理解者もあって反逆に値する人間の怒りを認める人が相当沢山居る。

そもそも光秀は美濃の土岐氏の一族で、可児郡可児野の明智城主であったが、一族は滅亡離散したゝめ諸国を流浪し、永禄十一年（一五六八）春尾張の信長に仕え、将軍足利義昭との間にあって信長のために斡旋役をつとめ重用された。この年は信長が前述の武田を滅ぼした年の七年前であり、光秀は秀吉や柴田のような譜代の家臣ではなく、云わば〃中間採用者〃であった。

しかし最初の功蹟によって近江国坂本を領し、次いで丹波の攻略を終えてその地位を得た。ところが性格が保守的で積極的の信長とは兎角意志の疎通を欠き、但馬因幡伯耆の攻略も新進気鋭の秀吉に奪われ、武田との合戦には大した功蹟も上らず、光秀の栄達は次第に望み薄となり、天下統一を前に旭日昇天の信長から段々うとんじられてきた。

往々にして、講子のいゝときは物事の判断が自己中心的となり、他への配慮を失う信長の慢心油断が、思いもかけぬところに大きな落とし穴があった。それが〃本能寺の変〃であるが、この機会を素早く捕えた秀吉が、光秀と天下を賭けて戦ったのが「山崎合戦」であり、後世に太閤秀吉を生んだ起爆剤となったのである。

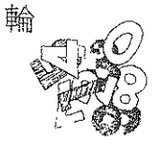
考えようによっては、光秀の反逆が無ければ秀吉は云うに及ばず、徳川家康も天下人になり得たかどうか、以後の歴史は随分変ったものになったかも知れない。

〃天下分け目の天王山〃は、合戦そのものは極めて単純であり、アッと云う間に決着がついてしまった。古今を通じて歴史というものは、単純な原因によって大きく左右されるのが特質なのかも知れないが、それから三百九十余年経った今日、当時を偲びこの周辺を静かに見渡すと、時の流れの偉大さに云いようのない感動すら覚える。

狂酔亭漫録（号外）

九十二歳の年輪

古谷竟水



去九月三十日夜ＮＨＫテレビは服部伸の講談は組小町を放送した。彼は本年満九十二歳の高令で舞台が勤められる事は、立派であり仕合せでもあり、羨望すべき存在である。

えるが、その語り口は颯爽として、江戸前の鉄火娘の意気と色気を完全に表現した。驚くべき芸の力である。彼の前身は一心亭辰雄と称する浪曲家で、日露戦争後の浪曲勃興期の波に乗り、当時の番付面では大関の地位を占め、桃中軒雲右衛門、吉田奈良丸等と比肩する大真打であった。

私は約六十年前彼の三日月次郎吉の一席を聞きその気魄に感服した思い出がある。当時漸く三十歳位で色白のイナセな好男子であったが、啖呵の切れ味は物凄かった。

彼の青年期に当時の権力者伊藤博文からお座敷が掛った際、「私にはお馴染の寄席のお客様何百人かが待って居てくれる、お偉方から呼ばれる事は芸人冥利か知らないが、寄席のお馴染様の期待には叛かれない」と云って断った程の気骨のある人である。

彼が浪曲から講談に転向したのは昭和十年頃かと思う。未だ寄席や放送に浪曲が盛んな時代に何故の転向か判らないが、彼の芸風は良く透る美声で会話や地合の気組は完璧であったが、なぜか節の部分の声は苦しく、其為四十分の一席でも始めの枕と中程と終りに数行程度の短い節を入れるのみで大半は講談調であった。其為演出の都合上講談に転向したものと思われるが、浪曲の三味線に乗った会話から講談の張扇のそれに転ずる事は相当苦労があったものと思われる。兎に角九十二歳の高令で舞台が勤められる事は、立派であり仕合せでもあり、羨望すべき存在である。

放送前宝井馬琴の話によると、服部老はたとえ寄席出演の際でもその日自宅で、必ず一席全部を予習するとの事、此話は先代清元延寿太夫が、連日芝居出演の際でも必ず当日朝自宅又は宿舎に出演者一同を集め、一回練習の上出勤したという話と好一対で、真面目を芸能人の範とすべき佳話である。

此の放送の後に上野広小路本牧亭女将の話では、十一月には本牧亭の改築成り、講釈や色物の寄席を継続し、服部伸老にも出演を依頼するとの事、此の女将が利害得失を超越した一貫信念の下に寄席芸能を守り抜いた功績は偉大で、実に侠客的傑物である。琵琶人にも本牧亭へ出演した人は多く、此の機会に本牧亭侠骨女将に対し深甚の敬意を捧げる。

（註　本稿は一昨年古谷竟水氏から寄せられたものであるが紙面の都合で未掲載のまゝ今日に至った。偶々古谷氏は身辺多忙のため毎回連載稿の執筆が本月は不可能となったので、代りに之を登載することにした。ー係ー）

言寸（23）

坂本竜馬

土佐藩の勤皇家、海援隊を指揮し西郷隆盛、木戸孝允らと薩長連合を図り王政復古に尽力中、中岡慎太郎らと共に京都河原町蛸薬師の民家で刺客に倒れた。二人の像は円山公園にも残るが、墓は護国神社裏山にある。

純金は鍍せず

神戸　田中　歉水

絃友先輩諸師より録音テープを沢山いたゞき、亦その至芸を拝聴し益々琵琶に魅かれて、紋の幽韻に限りなき歓喜と感激にひたり得る境地に身を置く事の有難さを泌々と感ずる様になりました。六十路の坂を越して、ようやく解りかけた処です。琵琶に限らずその曲の解釈、技法は人それぞれに個性がにじみ出て芸の深さを感得されます。

純金は鍍せず……益々品性を高め教養を身につけたいと念願して居ります。

梅の香におもふ

東京　滝原流　石

月寒く照らせば白梅の香におもふ
風邪に伏し琵琶の空音を夢に聞く
蕪汁京の七味屋の唐がらし
そこはかとなく春近し陽の和光
梅花咲かば春告げに来よ夢の鳥
立春の心を活ける梅花一枝
鶯宿梅うたなくも欲し幻影の鳥

今年は新年の御挨拶を失礼いたしました。十二月二十九日までに中央局に持参出来ず風邪に臥せりました。頂いた賀状に対し一々申訳を書きながら、十二、三日まで毎日少しづつ認める始末。

〃京絃〃いつもながら定期に御刊行、たゞたゞ感服いたして居ります。

京絃創刊　二十周年につきお願い

琵琶月刊機関紙「京絃」は琵琶文化の向上と琵琶楽の振興発展に資すべく昭和二十九年に第一号を発行して以来、一回の遅刊欠刊もなく来る六月号を以て創刊二十周年を迎えますが、之は偏に皆様の深い御理解のもと、絶大なご支援ご垂教のたまものと感謝感激致して居ります。

ついては同好の諸先生方からお祝の御寄書を頂戴し之を五、六月号に掲載して紙面を飾らせて頂きたいと存じますので御多忙中誠に恐れ入りますが多数御寄稿賜り度よろしくお願い申上げます。

京都琵琶協会　①　一月十二日午後一時から会員平井春嶺氏宅に於て総会を兼ね月例会開催。寒さの折柄風邪引きなどで出席率が悪かったが先づ平井氏から昨年度の

詳細な会計報告があり続いて伊吹正陽会長旧臘来入院加療中のため会長辞任の申出でがあり之を諒承して新たに本年度協会運営方針に就て各自忌憚のない意見を披瀝したが結局此際会長制を廃して常任理事制を敷きその合議に基いて一般会員が之に協力し一層の親善と発展を計ることに決定、田中、梅原、矢吹、牧、木村、平井、植村の七氏（薩摩一、錦心流三、筑前三）を常任理事に選出し乾盃夕食を共にしながらテープ録音鑑賞などをして七時半散会。尚協会事務所は今後平井春嶺氏方（京都市北区平野宮西町六四、〒603　電話〇七五（四六二）一四二三番）となった。出席者　伊東、戸田、田中、矢吹、安住、牧、古谷、木村、平井、植村。（敬称略）

②　上記に伴い一月十九日午後三時から事務所にて第一回常任理事会を開き分担事項（総務企画平井、庶務木村、会計牧、渉外宣伝田中、技術梅原・矢吹、情報植村）、四月春季演奏会開催の件など協議して六時解散。

③　二月二日午後一時会員矢吹旭美津女史宅で月例集会開催、戸田、田中、矢吹、安住、牧、古谷、木村、水内、平井、植村の諸氏出席、常任理事の分担事項発表、春季演奏会を四月十四日（日）安井金比羅宮会館に於て開催を可決し出演者の曲目決定、出演順の抽籤を行った外、今後毎月の茶話会は第一日曜日午後一時開催を原則とし至急適当な会場を物色すること、会員は万障繰合せ毎月出席して必ず一曲演奏し技術の向上をはかること、万一欠席の場合は当日午前中までにその旨事務所へ連絡することなどを申合せた後数氏交弾、夕食を喫して七時散会した。

錦心流一水会　一月十三日（日）午後一時京都東山の本妙寺に於て月例会を兼ね上記開催、役員選挙の結果支部長馬場鴨水氏（留任）、副支部長（庶務会計兼務）木下皇水氏が決定し出席者弾交夕食後解散した。

大阪琵琶同好会　一月十三日（日）午後新年会　二時大阪上六の近鉄会館あすか料亭で開催。天気もよく多数会員の外大正十三年当会設立当時の功労者光旭仙、松本旭勇両氏も列席「和を以て琵琶による思想善導と斯界の発展」を改めて契い合い和気靄々裡に七時過ぎ散会した。出席者は上記二氏の外石橋旭嶺、矢野旭信、辻旭城、島津嶺月、米原嶺泉、恵坂嶺雪、入江クニ子、柴田雪井、西川シズ子、大村旭令、中川治吉、中山鳳水、羹老駿水、田中良雄、作花旭友、寺尾旭吉栄、天津八千代（順不同、敬称略）

三位研修同志会　一月十五日（火）午後新春の集い　一時東京新宿柏ビルにて開催。門琵琶ー山崎錦幽、重衡ー富田晴蔚、城山ー山本隆水、勿来の関ー大村皷城、白虎隊ー生田晃堂、飯盛山徳古ー大和田鶴道、似俄ー西村嵩峻、大高源吾ー木原桜綾、足柄山ー西郷天風、修善寺物語ー杉山旗水、堅田落ー若宮旭登。以上演奏のあと新年宴に移り乾盃して散会した。

日本琵琶振興会　一月二十七日（日）午月例親睦研究会　後一時ー八時東京新宿洲鳳会館。出席者数氏演奏のあと本年の抱負、企画等につき鈴木流泉会長を中心に懇談盛会裡に解散した。因に今冬の異状乾燥等に起因する琵琶器の故障は会員に限り実費で修理される由。

第八十回義士祭　一月二十七日（日）昼初春琵琶演奏会　一時大阪天神筋朝陽会館、主催壽水会。重衡ー桜田・宮本、月下の陣ー増田、白虎隊ー金寄靖水、別れの盃ー小西甫水、松の間(下)ー小川吟水、山科の別れー菊地鷹子、本能寺ー神戸楊蓮清、常陸丸ー神戸松岡玲水、三方ケ原ー名古屋吉見白水、小栗栖ー大阪藤原英水、常盤御前(下)ー京都古谷竟水、四条畷ー京都平井春嶺、竜の口ー名古屋禄島漂水、雪晴れー会主東憲水。外に舞踊二、詩吟二。尚当日会場に赤穂義士堀部安兵衛の絶筆が展示され盛会であった。

若手琵琶人の会　先輩達の指導協力により第一回演奏会　りこの度流派を超越した上記の会が誕生しその初会公演を二月二十三日（土）午後三時から東京日本橋の第一証券ホールで日本琵琶楽協会外の後援で開催、旺